

2020/11/29

ヨハネの福音書 講解メッセージ②⑥

『悪魔について』 ヨハネ 8:34-44

✠ 人は神の言葉を理解できない

「イエスは彼らに答えられた。「まことに、まことに、あなたがたに告げます。罪を行っている者はみな、罪の奴隷です。奴隷はいつまでも家にいるものではありません。しかし、息子はいつまでもいます。ですから、もし子があなただたを自由にするなら、あなたがたはほんとうに自由なのです。わたしは、あなたがたがアブラハムの子孫であることを知っています。しかしあなたがたはわたしを殺そうとしています。わたしのことばが、あなたがたのうちに入っていないからです。わたしは父のもとで見たことを話しています。ところが、あなたがたは、あなたがたの父から示されたことを行うのです。」(ヨハネ 8:34-38)

「罪の奴隷はいつまでも家にいるわけではない」とイエス様が言われたのは、この地上での命は永遠ではないので、罪人は肉体の死と同時に滅んでしまうということです。いつまでも生きられる方はイエス・キリストだけです。イエス様だけが、私たちに永遠に生きられるようにできるのです。

イエス様はユダヤ人たちに「神のことばがあなただたのうちに入っていない」と指摘しました。これが罪です。神の言葉があなたの中に入っていないこと、すなわち、神と異なる思いをもつことが罪なのです。世の中は、罪を行いの規定でとらえますが、神様にとって問題なのは、行いではなく神の言葉を信じるかどうかです。ここでイエス様が「あなたがたの父」と言っているのは、悪魔のことです。彼らは悪魔にだまされ、悪魔の言葉を信じているために、神の言葉を信じることができません。これが罪なのです。

「彼らは答えて言った。「私たちの父はアブラハムです。」イエスは彼らに言われた。「あなたがたがアブラハムの子どもなら、アブラハムのわざを行いなさい。ところが今あなたがたは、神から聞いた真理をあなただたに話しているこのわたしを、殺そうとしています。アブラハムはそのようなことはしなかったのです。あなたがたは、あなたがたの父のわざを行っています。」彼らは言った。「私たちは不品行によって生まれた者ではありません。私たちにひとり父、神があります。」イエスは言われた。「神がもしあなたがたの父であるなら、あなたがたはわたしを愛するはずです。なぜなら、わたしは神から出て来てここにいるからです。わたしは自分で来たのではなく、神がわたしを遣わしたのです。」(ヨハネ 8:39-42)

ユダヤ人たちは、イエス様の言おうとしていることがまったくわかっていないので、相変わらずイエス様との会話がかみ合いません。

イエス様が言われた「わたしは神から出てきた」という言葉は、「神がわたしを遣わした」という意味です。この言葉だけを取り上げて、イエスは神の被造物であると主張する人たちがいますが、そうではありません。人間の勝手なものさしで聖書を理解しようとするのではなく、あくまでも聖書の言葉は聖書の言葉によって理解することが大切です。聖書は「神はただ一人である」と教えると同時に、「初めにことばがあった。…ことばは神であった。(ヨハネ1章)」と、イエス様が初めから神と共におられる神であることを教えています。この矛盾は、私たちの概念では処理できないことなのです。つまり、人間の理性で神を理解することはできないということです。これを自分の物差しで納得できるように、自分の中に収めようとするのが傲慢です。私たちは神の前にへりくだって、聖書に書かれていることを素直に受け入れることが必要なのです。

「あなたがたは、なぜわたしの話していることがわからないのでしょうか。それは、あなたがたがわたしのことばに耳を傾けることができないからです。」(ヨハネ8:43)

なぜ人間は神を理解することができないのでしょうか。それは、神は無限であり、私たちは有限だからです。神は、時間にも空間にも変化にも支配されませんが、人間は時間と空間という限りがある中でしか物事を考えることができません。だから、人間の知恵や理性で神を知ることはできないのです。

ところが、多くの人が理性で神を知ることができると思って、自分の理性が納得できる言葉に聖書を書き換えて理解しています。しかし、それは、信仰ではありません。信仰とは、あなたが納得することではなく、聖書の言葉を素直に信じることです。

✠ 悪魔から出た者

「あなたがたは、あなたがたの父である悪魔から出た者であって、あなたがたの父の欲望を成し遂げたいと願っているのです。悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。彼のうちには真理がないからです。彼が偽りを言うときは、自分にふさわしい話し方をしているのです。なぜなら彼は偽り者であり、また偽りの父であるからです。」(ヨハネ8:44)

「悪魔から出た者」とは、悪魔によって造られたという意味ではなく、「偽りの言葉を信じってしまった者」ということです。また、「悪魔は初めから人殺しである」とは、人を愛さないことを意味します。神の目指す運動は愛です。悪魔は偽りを語りますから、神と異なる思いをさも真実かのように話します。その偽りの言葉を信じ、神と異なる思いを抱くことが罪です。

では、その悪魔はいったいどこから来たのでしょうか。実は、この発想そのものに落とし穴があります。人間はすべての出来事に因果関係を見つけようとするものですが、それはこ

の地上の考え方です。つまり、理性という自分の枠の中ですべてを理解しようとする考え方なのです。

悪魔の起源についての伝統的な解釈は、神が造られた天使が高ぶって神に逆らう者となり、悪魔になったという考え方です。しかし、この考えでは、悪魔は、初めは良きものだったこととなりますが、イエス様は、悪魔は初めから悪だったと言っておられます。さらに、神の被造物であり、神の思いしか持っていなかった天使が、なぜ神と異なる思いを持つことができたのか、という疑問が生まれます。このように、神や悪魔について自分の枠の中に収めようとする、次から次に疑問が生まれるのです。この疑問に対する答えとして、アウグスティヌスは、神の被造物は不完全であるから、と考えました。人間も神の被造物ですから不完全であり、不完全ゆえに完全を目指すのですが、それを目指すか目指さないかは個人の自由意思に任されていると、アウグスティヌスは考えたのです。完全を目指すことが善であり、悪とは善の欠如であるとアウグスティヌスは言いました。天使が墮落して悪魔になったのも自由意思によるものであり、人が罪を犯すのも自由意思によるものと考えられたのです。

しかし、私たちが罪を犯す原因は自由意志にあるという考え方には問題があります。自分の選択によって罪を犯したのならば、罪の責任は自分にあり、罪から解放されるには自分で責任を取る必要があります。そうすると十字架のあがないの意味がわかりません。アウグスティヌスはそれを、人は自由意志を使えない状態になっているのだと説明しましたが、このように、問題点を指摘されるたびに、キリスト教が分解され、いろんな教派に分かれてきました。問題の本質はどこにあるのでしょうか。

✠ 悪魔論から学ぶこと

そもそも、なぜ悪魔の起源は天使であると言われるようになったのでしょうか。その根拠の一つになっているのが、次の御言葉です。

「また、主は、自分の領域を守らず、自分のおるべき所を捨てた御使いたちを、大いなる日のさばきのために、永遠の束縛をもって、暗やみの下に閉じ込められました。」
(ユダ 1:6)

暗闇の下に閉じ込められた御使いが悪魔になったと考えたわけですが、しかし、この御言葉は次のように続いています。

「御使いのかしらミカエルは、モーセのからだについて、悪魔と論じ、言い争ったとき、あえて相手をののしり、さばくようなことはせず、「主があなたを戒めてくださるよう」と言いました。」(ユダ 1:9)

ここに墮落した天使とは別に悪魔が登場しています。つまり、墮落した天使は悪魔ではないこととなります。これは、なぜ御使いが神と異なる思いを持つことができたのかという疑

問に、一つの答えを与えます。御使いが罪を犯したのは、悪魔が神と異なる思いを持ち込んだからだと考えられるからです。

もう一つ、悪魔の起源は墮落した天使であるとする根拠に、次の御言葉もよく引用されます。

「暁の子、明けの明星よ。どうしてあなたは天から落ちたのか。国々を打ち破った者よ。どうしてあなたは地に切り倒されたのか。あなたは心の中で言った。『私は天に上ろう。神の星々のはるか上に私の王座を上げ、北の果てにある会合の山にすわろう。密雲の頂に上り、いと高き方のようになろう。』しかし、あなたはよみに落とされ、穴の底に落とされる。」(イザヤ 14:12-15)

「暁の子」は、ラテン語でルシファです。ここから、悪魔の名前はルシファだと言われるようになりました。しかし、そもそもこれは、バビロンの王についての歌だと前置きされたものです。

「あなたは、バビロンの王について、このようなあざけりの歌を歌って言う。「しいたげる者はどのようにして果てたのか。横暴はどのようにして終わったのか。」
(イザヤ 14:4)

バビロンの王は、イスラエルを滅ぼし、ユダヤ人をバビロンに連行しました。これが 597 年のバビロン捕囚です。聖書には、これはバビロン王についての記述だと書いてありますが、悪魔についてであるとは、実はどこにも書いていません。それを後の時代の人が「これは悪魔のことに違いない。」と、解釈したのです。イエス様が悪魔について語っているのは、「悪魔は初めから人殺しであり、真理に立ってはいません。」(ヨハネ 8:44) ということだけです。ということは、悪魔は初めから存在していたと考えられます。ところが、確かに聖書は、初めは神しかおられなかったとも書かれています。しかし、悪魔が墮落した天使であるなら、天使を造った神様が悪の創造者であることになります。自分で悪をつくって、自分で救い出すなどというシナリオは、まるで茶番劇です。

つまり、結論は、「私たちにはわからない」ということなのです。なぜわからないのか、それは理性には限界があるからです。神がいるとか、いないとか、人にはわからないし、証明することもできません。それは納得する対象ではないからです。神を納得する対象にしようとした瞬間、悪魔について混乱が生じ、異端が生まれました。わからないことは信じるしかないのです。

☒ 神の言葉を理性によって曲げてはならない

なぜ理性は、神を納得する対象にしようとするのでしょうか。

人間とは、肉体と神のいのち（魂）が与えられたことによって生まれた「意識」という存

在です。神のいのちが生きていて普遍的な運動をしているところに、体を通してこの世の情報が持ち込まれ、意識を生み出します。それが人間です。神のいのちは、三位一体の神が一つであるように、一つとなる運動をしています。これを愛と言います。理性は、この運動をすべての物事にあてはめ、人と神を結び付けようとするだけでなく、すべてのことを関連付けて統一しようとし、罪を犯すと罰があるとか、良いことが起きるように縁起を担ぐとか、とにかく行いと出来事を結び付けようとするのが癖になったわけです。

この癖によって聖書を読むということは、自分の物差しにあてはめて因果関係を見つけようとするということです。ところが、神は時間にも空間にも左右されない方なので、この世の因果関係は通用しません。それなのに、自分の枠に収めようとするのが、理性の暴走です。それでは聖書を理解できません。理性は悪いものではなく、暴走させることが問題なのです。人間の理性は、神の言葉を整理するために使うものであって、理性を優先して神の言葉を曲げてはならないのです。

神の言葉は、ただ素直に受け取るものです。神はどこから来たのかについても、イエス・キリストは次のように語っておられます。

「イエスは答えて、彼らに言われた。「もしこのわたしが自分のことを証言するなら、その証言は真実です。わたしは、わたしがどこから来たか、また、どこへ行くかを知っているからです。しかしあなたがたは、わたしがどこから来たのか、またどこへ行くのか知りません。」(ヨハネ 8:14)

神に因果関係は通用しません。この世界は永遠であり、始まりは神です。神に始まりはありません。神は無限であり、現在も過去もありません。二律背反です。人間の理性では無限性はわからないので、人は神を知り得ないのです。私たちが唯一できることは、信じることだけです。「人の知恵によって神を知ることができないのが神の知恵である。」と、神は言われました。この原則を忘れてはいけません。この原則を忘れると、迷路に陥ってしまいます。

「またイエスは道の途中で、生まれつきの盲人を見られた。弟子たちは彼についてイエスに質問して言った。「先生。彼が盲目に生まれついたのは、だれが罪を犯したからですか。この人ですか。その両親ですか。」イエスは答えられた。「この人が罪を犯したのでもなく、両親でもありません。神のわざがこの人に現れるためです。」
(ヨハネ 9:1-3)

人は、罪を犯したら罰があるという因果関係を信じ、災いに遭うのは罪を犯したからだと考えます。しかし、イエス様は、神との関係に因果関係は成立しないことを教えておられます。

よく「こんなことをしたら神様に怒られる」と考える人がいますが、そんなことはありません。因果関係は行いによって人の評価が変わります。しかし、神様のものの見方は不変なので、行いによって左右されたりはしません。誰でも、神の御手につかまれば、救われるの

です。

「人が義と認められるのは、律法の行いによるのではなく、信仰によるというのが、私たちの考えです。」（ローマ 3:28）

「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」（ローマ 8:38-39）

どんなにあなたを悪い人間だと訴える人がいても、イエス様があなたを弁護してくださいます。神様があなたを良きものとして造ったことに変わりがないからです。

私たちが目指すべきなのは、御言葉を納得することではありません。信じることです。理性で納得できないことを受け入れるには信じるしかないのです。「自然界ではありえないけれど、聖書がそう教えているから信じる。」「自然界には因果関係があるけれど、神の言葉にはない。」…これらのことを肝に銘じ、神の言葉を素直に信じることです。神様が、「あなたはもう永遠のいのちを持っている」と言っておられるのですから、ただそれを受け取ればよいのです。

私たちの問題は、神の言葉が食べられないことにあります。それが罪です。「罪と戦う」とは、「神様がそう言っておられるなら信じる。」と神の前にへりくだって神の言葉を信じることです。信仰とは、まだ見ていない事実を確信することであると聖書は教えます。聖書のことばを素直に食べることができれば幸いです。